

ポンドと BREXIT

BREXIT の方針を巡る英国政府内の対立で、首相に異を唱える主要閣僚二人が辞任した。政治リスクの顕在化で普通ならポンドが売られるところだが、そうはならなかった。

閣内の対立構造は以前から明らかであり、BREXIT 強硬派が抜けたので EU との交渉が円滑に進む期待が増したからかもしれない。だがそれでもビジネス側は具体的なことが決まらないので明確な方針や戦略の立てようがない。

金融機関などはロンドンの陣容は残しつつ、パリ、アムステルダム、ダブリン、フランクフルトなどの拠点への人員増加を図るなど両にらみのところが多い。

BREXIT は一昨年 6 月の国民投票で決まったわけだが、ポンドは下落の勢いを強め、昨年の第一四半期あたりを底に、その後戻り基調に入った。その展開は世界の中央銀行や財務当局が保有するポンドの外貨準備の割合の傾向と符合している。

世界の外貨準備の通貨構成の割合は IMF が四半期ごとに公表しているが、そのデータによればポンドの割合は 2017 年の第一四半期をボトムに今年の第一四半期まで増加傾向をたどってきた。

ただ第二四半期のデータは 10 月に入らないと公表されないので推測になるが、外貨準備の割合は減少している可能性が強い。ポンドの戻り基調は 4 月をピークにその後は下落していて、その傾向は続くと考えられる。

従って閣僚の辞任などを契機にポンド売りが強まってもいいわけだが、短期的にはそう簡単にいかないのがポンドという通貨だ。

ポンドの変動要因としては BREXIT の他にも金利や景気動向がある。他にもユーロとの関係で安全通貨/避難通貨としての面を見せることもある。もちろんドルの動きに引きずられる。

私は個人的にはポンドが一番難しい通貨だと実感している。一番儲けやすいが、損もしやすい。英国の銀行にいたとき、アジアの時間では捌けないほどの金額のポンドを建値せざるを得ず、苦い思いをしたことがトラウマになっているのかもしれない。

ジョージ・ソロスは BREXIT の国民投票の時、離脱が決まればポンドは暴落し、かつてのポンド危機と同様になると言った。だが離脱が決まりポンドは下落したが暴落とまではいかなかった。

BREXIT のポンドへの影響が出るのはこれからだろう。具体的なことが決まっても、決まらずそのまま交渉期限を迎えても、英国の EU 離脱は英国にとって膨大なコストを課し、投資機会が減少する可能性が高いからだ。ただ今はそれを計量できないだけだ。